

## メッセージアウトライン サムエル記第一1:1～28 「サムエルの誕生」

サムエル記第一と第二はもともと一冊の書物であったが、旧約聖書がギリシャ語に訳された段階(BC3世紀頃)で二巻に分けられた。これら二つの書物は、士師時代の末期から、ソロモンが即位するまでのイスラエル史を扱っている。これらの書物が「サムエル記」という名で呼ばれるのは彼が著者という意味ではなく、この書に登場する最初の重要人物だからである。彼は最後のさばきつかさ(士師)としてイスラエルを統治しただけでなく、神から立てられた預言者として、この書の他の二人の重要人物サウルとダビデを王とするために油注ぎを行った。本書がこれらの王の名ではなく、預言者としてのサムエルの名で呼ばれているのは興味深い。この書はサムエル、サウル、ダビデに関する多くの信頼しうる同時代の資料がBC9世紀頃にまとめられたと考えられる。しかし、それを誰がどのようにまとめ、書物として記したかは不明である。

[1]「エフライムの山地ラマタイム出身のツフ人の一人で、その名をエルカナという人がいた。この人はエロハムの子で、エロハムはエリフの子、エリフはトフの子、トフはエフライム人ツフの子であった」

「エフライムの山地」…カナンの地に定住したイスラエル十二部族のうちヨセフの子であるマナセとエフライムのうち、弟のエフライム部族が割り当てられた地。死海の北西にあたり、ヨルダン川を東の境とし南をエリコ、アイ、ベテルに接し、北はシェケムに至り、西はダン部族の定住地に接し、南北にヨルダン川と並行して山地が走っている地である。「ラマタイム」…場所不明。「ラマ」とは高い所の意。「ツフ人」とは先祖の「ツフ」から広がった人々と思われる。「エルカナ」は神が所有されたという意味。エルカナの系図を遡ればイスラエル(ヤコブ)の子レビに至る。→ I 歴代6:34-38 レビ族は祭司のもとにあつて、神の宮に関する様々な祭ごとに仕える部族である。

[2]「エルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといった。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった」

「ハンナ」…いつくしみの意。「ペニンナ」…豊かな髪の毛の女の意。エルカナはハンナが不妊であったのでペニンナをもう一人の妻にしたと思われる。これは家系と土地相続のために子を産む妻を得なくてはならなかったという慣習が背景にあったからと思われる。しかし、複数の妻を持つことは後に様々な問題を引き起こすこととなり、神のみこころはあくまでも一夫一妻であることを知っておかなければならない。そして、それはキリストと教会との関係にもたとえられている。→創世記2:24、エペソ5:31-32

[3]「この人は、毎年自分の町から上って行き、シロで万軍の主を礼拝し、いけにえを献げることになっていた。そこでは、エリの二人の息子、ホフニとピネハスが主の祭司をしていた」

「シロ」…ベテルの北北東約15キロメートルの地。そこに出エジプト以来の会見の天幕(幕屋)があった。毎年この地で収穫祭が行われ、そのための巡礼が各地から上って来た。→士師記21:19「万軍の主」…この時代からよく用いられる称号。①天地万物の主②天使の軍の主③イスラエル軍の主などの説があるが、文脈からは③と思われる。「いけにえ」は神を礼拝する時の供え物で、動物としては牛、羊、やぎ、鳩など。「エリ」…「きね」、「ホフニ」…「おたまじゃくし」、「ピネハス」…「黒人」の意。「祭司」…国家、部族などの代理者として神に仕え、奉仕する神と人との仲保者。最初の祭司はアロン(出28:2-3)。この時、祭司エリは老年となっていたため、その息子たちホフニとピネハスが祭司となっていた。

[4-8] ある日エルカナは主を礼拝するためにハンナとペニンナと彼女の息子、娘たちを連れてシロに行った。エルカナはいけにえを献げた。このいけにえは礼拝者も一部を食べることができ(レビ7:11-21)、それでエルカナはそれを妻たちと子どもたちに分け与えるようにしていたが、ハンナには特別の受ける分を与えていた。主は彼女の胎を閉じておられたが、彼がハンナを愛していたからである。(5) 彼女の不妊は主によるものであったことが分かる。子どもたちを持つペニンナはハンナに敵対しており、子を産まないことで彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。そのようなことが毎年主を礼拝しに行くごとに繰り返されていたので、ハンナは泣いて食事をしようとしなかった。(6-7) その様子を見て、夫エルカナは「あなたにとって、私は十人の息子以上のものではないか」(8) と彼女をなだめる。「十」は完全数で、それほど多くの息子たちがいても私はそれとは比べものにならないほどであるという意味。しかし、そうであってもハンナにとっては子どもがいないことの慰めにはならない。

[9]「シロでの飲食が終わった後、ハンナは立ち上がった。ちょうどそのとき、祭司エリは主の神殿の門柱のそばで、椅子に座っていた」

エリは神の宮の多くの実務は息子たちに任せていたが、彼自身は主の神殿の門柱のそばで椅子に座り、礼拝者たちの様子を見ていたのであろう。

[10-11]「ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、主に祈った。そして誓願を立てて言った。『万軍の主よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、主にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。』」

男の子が生まれたら、その子を一生の間主にお渡しします。これは大変な誓いである。一般的に自分の産んだ子は可愛く、特に幼年期の子は目の中に入れても痛くないほど可愛いものであるが、その子を神にささげるとは自分の手もとから離

して神に仕える者とするという大決断である。また「その子の頭にかみそりを当てません」とは神への献身と聖別のしるしを意味する。→士師記13:5,7 「誓願」…神に誓いを立てて願い事をする事。その誓いを破ることは許されなかった。

[12-14]「ハンナが主の前で長く祈っている間、エリは彼女の口元をじっと見ていた。ハンナは心で祈っていたので、唇だけが動いて、声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのだと思った。エリは彼女に言った。『いつまで酔っているのか。酔いをさましなさい。』」

エリの誤解は当時の神殿礼拝では酒を飲むほどの信仰的墮落ぶりがあり、また無言で祈ることがめったにないほどの珍しいことであったことを示している。

[15-16]「ハンナは答えた。『いいえ、祭司様。私は心に悩みのある女です。ぶどう酒も、お酒も飲んでおりません。私は主の前に心を注ぎだしていたのです。このはしためを、よこしまな女と思わないでください。私は募る憂いと苛立ちのために、今まで祈っていたのです。』」

ハンナはエリに、自分は酒に酔っているのではなく、募る憂いと苛立ちのために、今まで祈っていたのですと弁明する。苦しみと悲しみに満ちた切実な祈りは、おのずと心を注ぎだすような祈りとなる。

[17-19]「エリは答えた。『安心して行きなさい。イスラエルの神が、あなたの願ったその願いをかなえてくださるように。』彼女は、『はしめが、あなたのご好意を受けられますように』と言った。それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前のようにではなかった。彼らは翌朝早く起きて、主の前で礼拝をし、ラマにある自分たちの家に帰って来た。エルカナは妻ハンナを知った。主は彼女を心に留められた」

エリはハンナの行状が切実な信仰から出ていたことを知り、納得した。そして彼女に祝福のことばを述べた。「その顔はもはや以前のようにではなかった」…ハンナは自分の祈りが聞かれたことを確信して表情も明るくなり、自分たちの家に帰った。彼女は神にすべてをおまかせしたのであった。「知った」とは夫婦としての営みをするという意味。そして主はハンナを心に留められ、彼女の祈りに答えられた。

[20]「年が改まって、ハンナは身ごもって男の子を産んだ。そして「私がこの子を主にお願ひしたのだから」と言って、その名をサムエルと呼んだ」

「サムエル」…「神から求めた者」あるいは「神の名」の意。

[21-23]「夫のエルカナは、年ごとのいけにえを主に献げ、自分の誓願を果たすために、家族そろって上って行こうとした。しかしハンナは、夫に『この子が乳離れして、私がこの子を連れて行き、この子が主の御顔を拝して。いつまでもそこにとどまるようになるまでは』と言って、上って行かなかった。夫のエルカナは彼女に言った。『あなたがよいと思うようにしなさい。この子が乳離れするまでとどまりなさい。ただ、主がそのおことばを実現してくださるように。』こうしてハンナはとどまって、その子が

乳離れするまで乳を飲ませた」

ハンナは男の子が生まれたなら、その子を一生の間、主にお渡ししますとの誓願を立てていたので、自分が主の宮に上る時にその子サムエルを連れて行き、その子を主のもとに、具体的には祭司エリのもとに委ねて来なければならない。それはサムエルが乳離れする時と彼女は決めていたのであろう。あのモーセがエジプトの王女の子として育てられることになった時、やはりモーセが乳離れするまでは実の母のもとで養育されることになり、その期間にモーセは自分が、ヘブル人であることを母に繰り返し教えられ、育てられたことであらう。→出2:1-10

ハンナの場合もサムエルが乳離れするまでの間に、彼がどのようにして主なる神によって与えられ、やがて神の宮で主なる神に仕える者となるのかを繰り返し教え、しつけ、育てていったことであらう。この乳離れするまでの期間は二年から三年くらいであったと思われる。

[24-25]「その子が乳離れしたとき、彼女は子牛三頭、小麦粉一エパ、ぶどう酒の皮袋一つを携えてその子を伴って上り、シロにある主の家に連れて行った。その子はまだ幼かった。彼らは子牛を屠り、その子をエリのところに連れて行った」

これはハンナと幼子サムエルだけが献げものをもって行ったのではなく、年に一度の夫エルカナおよび全家族が行くシロへの巡礼の時であったであらう。ここでは特にエルカナの妻ハンナの行為が強調されている。

[26-28]「ハンナは言った。『ああ、祭司様。あなたは生きておられます。祭司様。私はかつて、ここであなたのそばに立って、主に祈った女です。この子のことを、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主におゆだねいたします。この子は一生涯、主にゆだねられたものです。』 こうして彼らはそこで主を礼拝した」

2:1-10のハンナの祈りは彼女の神への賛美と喜びと感謝をよく表している。

苦しみ、悲しみの中でハンナの祈りは聞かれた。主が与えてくださったサムエルはハンナの誓願のとおり、主にゆだねられ、シロの神の宮で祭司エリのもとで仕え、育てられることとなった。サムエルは母から言い聞かせられていたであらうが、母や家族と離れることは三歳前後の幼児にとって大きな悲しみであったであらう。しかしこのようにしてサムエルが祭司のもとで仕えるようになるのは、そこに、これから展開される神の大きなご計画のうちにあったのである。やがてこのサムエルは成長し、神によって預言者として立てられ、後に登場するサウルやダビデに油を注いで王とすることとなる。すべては神のみこころとご計画のうちに進んで行く。

主なる神は信仰者の祈りを聞いてくださるお方であるが、その祈りの中でも、特に苦しみと悲しみの中にある時の祈りこそ、真に心を注ぎだす祈りとなり、神のもとに迫る祈りとなる。そして神はこれを聞いてくださり、みこころをなしてくださるのである。→マタイ26:36-39、Iヨハネ5:14-15